



嵯峨大念仏狂言

嵯峨狂言クラブ公開稽古

橋弁慶船弁慶

佛

日時 令和四年三月二十六日(土)
 場所 嵯峨清凉寺 狂言堂
 時間 午後一時開場
 午後一時半開演



公開稽古直前
練習風景メモリー

橋弁慶



牛若丸と弁慶の迫力ある対決シーン。



牛若丸が橋の上で侍浪人を待ち構えている場面。

船弁慶



今年度で演者を卒業する
松本紗奈さん(右)と爲季なぎさん(左)。



静御前と義経が
別れの盃を交わす場面。



義経と弁慶が知盛の亡霊と戦うシーン。

橋弁慶

おはなし

夜になると、五条大橋に現れた牛若丸が、笛を吹きながら通行人に紛れている侍浪人らを斬り捨てています。ある夜、弁慶は、従者と家来に五条天神に詣でると告げます。従者は人斬りが現れるので思い留まるよう進言しますが、弁慶は聞かず、五条天神へと向かいました。五条大橋では、牛若丸が再び、侍浪人らを斬り捨てていました。そして、橋の欄干の上に立ち、侍浪人らを待ち構えていました。そこに弁慶と従者が現れます。牛若丸は笛を吹きます。それを聞いた弁慶は人斬りがいること気がつき、周囲を探ります。そしてついに牛若丸と対決します。弁慶は薙刀で牛若丸に挑みますが、牛若丸にひらりとかわされ、薙刀を叩き落とされてしまいました。再度、刀を向けますがそれでも歯が立ちません。力尽きた弁慶は、牛若丸に降伏し、家来になる約束をしてその場から立ち去ります。

配役

- 牛若丸 川口沙羅(広沢小五年)
- 弁慶 山崎沖七(正親小五年)
- 従者 田部井慧吾(嵯峨小三年)
- 斬られ 北村孟裕(西京極小三年)
- 為季 新太(嵯峨小一年)
- 通行人 延原啓太(夢窓幼稚園年中)
- 松本波留(嵯峨幼稚園年中)
- 為季 源太(嵯峨小一年)
- 前田 莊輔(広沢小一年)
- 北村 基彰(西京極小一年)
- 山下 せり(夢窓幼稚園年中)

みどころ

「船弁慶」、「橋弁慶」ともに主役は牛若丸(後の源義経)と弁慶。今年の大河ドラマ「鎌倉殿の13人」にも登場しています。「橋弁慶」では京都五条大橋での二人の出会いが描かれ、「船弁慶」では、献身的に義経を支える弁慶の様子が伺えます。どちらも能楽の演目にある有名なお話です。

嵯峨狂言豆知識

「大念佛狂言とは？」
「嵯峨大念佛狂言」は、壬生狂言やえんま堂狂言と並ぶ京の三大狂言の一つで、国の「重要無形民俗文化財」に指定された伝統芸能です。

鎌倉時代中期に円覚上人が融通念仏を広める手段として、仏の教えをわかりやすく無言劇にして見せたのが始まりと伝えられています。以来、約七百年の間、嵯峨の里人の親から子、子から孫へと大切に守り伝えられてきました。

一般的に知られている、能のあいだに演じる狂言との違いは、全員お面をつけること、そして無言劇であることです。昔、「大念佛法会」に集まる大勢の人々に仏の教えを伝えるのには声が届かず、識字率も低く

船弁慶

おはなし

平家追討に功績をあげた源義経でしたが、兄の源頼朝に疑惑を持たれ、鎌倉方から追われる身となります。話は、義経が弁慶や忠実なお供とともに西国へ逃れようと、摂津大物の浦へ到着した場面から始まります。義経は弁慶と水夫を従えて船出を思案しています。ここまで同行してきた静御前でしたが、これ以上女の身で進むことは難しく、やむなく義経と離別することになり、別れの杯を交わします。弁慶は、船の準備を水夫に言い渡し、静御前との別れを惜しむ

義経に助航を促しました。船に向かう義経に、静御前はすがりつきますが、弁慶は強引に二人を引き離し、船出を命じます。

ところが、船が海に出たところに、周囲が霧に覆われます。そして壇ノ浦で滅亡した平家一門の総大将であった平知盛の亡霊が現れ、義経を海に沈めようと襲いかかります。義経は刀で向かい、弁慶は数珠を握って念仏を唱えて御成いし、亡霊を消し去ります。

配役

- 義経 松本紗奈(嵯峨小六年)
- 弁慶 為季 なぎ(嵯峨小六年)
- 水夫 松本 理玖(嵯峨小三年)
- 静御前 田部井 柚羽(嵯峨小五年)
- 知盛 高瀬 弥太郎(御室小五年)

〈後見〉

- 小西 小三郎
- 橋隆仁
- 小檜山 一良
- 松井 銀司
- 〈囃子方〉 加納 敬二(鉦・太鼓)
- 近藤 奈央(笛)
- 松本 紗奈(笛)
- 為季 なぎ(笛)
- 〈着付方〉 小西 葉子
- 中川 登志子

〈解説〉

- 加納 敬二
- 芳野 明

※いずれも嵯峨大念佛狂言保存会会員

嵯峨大念佛狂言保存会 今後の公開日程

■春の公開稽古

日時/令和4年 4月3日(日)・9日(土)・10日(日)
時間/いずれも1時半～3時半

※会場は清涼寺境内、狂言堂

くて文書が使えなかったため、パントマイム(無言劇)が有効だったのでは、と考えられています。

こうして始まった大念佛狂言は、江戸時代に歌舞伎の要素が加わり、現在のような演目の形になっていきました。「土蜘蛛」や「船弁慶」など、能や歌舞伎でお馴染みの演目も多く残っています。